



キリストは私たちの平和であります

(エフェソ2.14)

ヴィタリ・ドメニコ神父



今年、特に戦後 70 年にあたって、広島の被爆や第二次世界戦争の悲劇、五千万人ぐらの犠牲者、二百万人ぐらの日本人の失われた尊い命を思い越します。

毎年、全世界の国でその思いが新たにされてきました。ここで聖ヨハネ・パウロ 2 世が広島で述べた平和のアピールの言葉を思い出します。

「過去を振り返ることは将来に対する責任を担うことです」。

私たちはいまだに過去の戦争について誰が悪かったか、だれの責任だったかを論じあっている。

過去をやり直すことができないから無駄なことをするだけだ。真剣に国と世界に対して

責任を果たしていかなければならないことでしょう。

そういう意味で教皇フランシスコは「世界は広島と長崎から何も学んでいない」と言われました。去年の夏、「第三次世界戦争はもうすでに始まった」とも言っていました。

私たちは国々の政府の話し合いに負かすことが出来ない。どんな国も身近な利益に囚われて、民族主義と国家主義に走ってしまいます。

私たちはイエスを信じます、しかも十字架につけられたイエスを。

その十字架の上からイエスは隣の犯罪人も母マリアと他の婦人、またローマの番兵、群衆、そして世界の果てまで、歴史の終わりまで私たちも「見て…深く憐れむ」(マルコ6, 34)。

イエス様にとって国境、民族も言葉の違いもありません。

皆を兄弟姉妹として見ておられるからです。私たち皆が神様の命にあずかる者として、同じ権利をもって、侵してはならない人間です。良い人のためにも悪い人のためにも自分の血を流されました。

「二つのものを一つにし、ご自分の肉において敵意という隔ての壁を取り壊した」(エフェソ2, 14)。

この元来の人間の見方に戻らないと平和を実現させることができない。

どんな人も迎えて協力して生きることやどんな小さくて弱い命でも支えていかなければ、戦争を繰り返してしまい、平和の実現は難しくなることでしょう。



未来をつくる人たちへ

-昭和ひとけたからの伝言-

YY



今年もあの時を思い出さずにはおれない夏を迎えました。あの悲惨きわまる大戦が終わって七十年が過ぎ、両親も学校の先生も戦争を知らない人ばかりですね。今世界の各地で、紛争のために親や家を失なったり、食べるものもなく学校にも行けない子どもたちが、命の危険にさらされている様子をテレビなどで見ても、遠い世界のように思っているのではないのでしょうか。私たちが子どもだった頃、日本はほぼ同じようだったのです。軍が実権を持っていた日本では、自由にものを言うことが禁じられ、戦争に勝つためにすべてを耐え忍ぶことが強制されました。おやつはおろか、日常の食事もまともにできず野草やイナゴ、カエルなど食べられるものを探しました。米の配給がなくて弁当がつかれず味

噌汁だけの給食で空腹をしのぎました。教科書をはじめ学用品すべてがおさがり。戦地の兵隊さんをしのんでマフラー、手袋など禁止。靴はないので下駄で通学し、冬でも裸足でした。小学校は大戦突入の前に国民学校となり厳しい訓練の毎日でした。日本中が激しい空爆におびえ、国民学校3年以上が親元をはなれて地方の親戚や知人に預けられ、行く先のない子らは地方のお寺などへ先生に引率されての集団疎開でした。私は1945年国民学校を卒業し、女学校に入学しましたが、作業と訓練に追われ、授業はわずかでした。そして8月6日、私は家とともに父母、祖母、姉二人を奪われ

ました。軍都だった広島町は一瞬にして人も建物も熱戦と爆風でことばにつくせない有様となりました。あの日、中学1、2年約8千人が軍の命令で市内中心部での作業に動員され、約六千人もの生徒が命を奪われた広島最大の悲劇を忘れてはならないのです。被爆の苦しみはその時だけでなく、放射線の影響が続きました。今、原子力発電が推進されていますが、原爆と原発は表裏一体のようで、福島第一の事故からも被曝の不安が続きますし、核兵器への転用も心配されます。戦中戦後は想像もつかない現在の豊かな暮らしですが、みつめ直し、未来への道すじを考えてほしいと思います。

ネパール大地震チャリティコンサートを終えて

IK



8900人を超える死者…全壊した家屋はおよそ49万棟。今年4月にネパールで発生した大地震の悲惨さを示しています。

この大地震を受けて、6月28日(日)に、私たち幟町カトリック教会の信徒と、県内に住むネパール人、それにエリザベト音楽大学の学生たちと世界平和記念聖堂にてチャリティコンサートを開きました。当日にはおよそ200人の方にご参加いただき、チケットの売り上げと募金をあわせて、27万6665円の寄付金が集まりました。ご参加いただいた方、そしてコンサートを実現するのを可能にしたヴィタリ神父様や、カトリック広島教区の事務局の方々、それに広島フィリピン協会の皆さんにこの場を借りて感謝申し上げます。集まった寄付金は早速、ネパールで女性や子どもの支援にあたっているNGOに送られました。

私がチャリティコンサートに関わるようになった経緯を少し説明させていただきます。

私は去年8月に勤めている会社の転勤で東北の山形県から広島に来ました。仕事はテレビ局の記者をしているのですが、東北では4年前の東日本大震災の取材に力を入れていました。そして広島では去年8月20日に大規模な土砂災害がありました。これまで災害で被災した人たちの取材を続けてきた私にとって、ネパールの大地震は人ごとではありませんでした。ニュー



スが飛び込んですぐ、広島県内に

ネパール人のコミュニティがないか探しました。そこで知り合ったのが今回、一緒にコンサートを企画した広島大学で学ぶネパール人医師たちでした。彼らは医師としての技術を磨き、将来母国に貢献したいという思いで日本で勉強しています。地震から2日後に出会った彼らの中には、現地家族で連絡がとれない人もいて、不安な顔をしていました。その後も大きな余震が続き、彼らは夜も眠れないと疲れきっていました。しかし、研究の傍ら医師としてすぐ現地に出向けないこともあり、何か貢献できないか考えていた彼らは、同じ留学生ということで知り合った幟町教会の信徒であり、エリザベト音楽大学の学生と協力してコンサートを企画することになったのです。

道端で募金を呼びかけるというほうが簡単だったという考えもあるかもしれませんが、コンサートのなかでは、ネパールの文化や現地の状況をわかってほしいということで、コンサートという形式にしました。

結果的に、多くの方々に来ていただき、コンサートのあとは、「ネパール人の心を感じました」とか、「ネパールのことがよくわかりました」という感想を寄せてくださる方もいて、少しでもネパールを身近に感じてもらえたのではないかと思います。

いま日本では「ほかの人への関心」「想像力」が欠けていると思います。それはまず「知る」ことから始まるのかもしれませんが、身近な人が悩んでいることや、災害にあったり、紛争が続いたりしているほかの国の現状。そういうことに目を向けることで、いま私たちには何ができるのか考えることができると思います。

世界中、みんな神の家族なわけですから。

広島地区教会学校
リーダー会主催

家族大会のお知らせ

今秋11月15日(日)、祇園教会において、テーマ「**✠信仰～やっぱり家庭から～**」で「家族大会」を開催します。

今年は広島教区テーマの第一段階「家庭へのチャレンジ」の2年目であり、具体的アクションの年と捉え、家族で参加できる行事として企画しました。

家族大会の目的は、大会に集う子ども同士、保護者同士、仲間と分かち合い、家族と共に、仲間と共に神の愛を実感する喜びの時間を過ごすこと、もうひとつは、大会当日までの準備、過程(プロセス)を通して、家

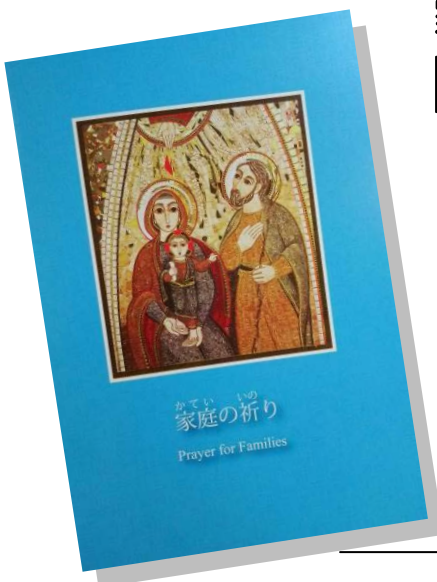
庭について各教会でも考え行動してもらい、その準備の中で、子ども同士、保護者同士の繋がりを深めてもらい、当日は更に他の教会とのネットワークを広げて頂くことです。

大会の内容は、前半は子どもたちによるパフォーマンス、後半は保護者同士の分かち合いと子どもたち向けの楽しいイベントを企画しています。

広島地区の信徒の皆さまのご理解、ご支援を頂きますよう、また、家族大会が成功しますようお祈りをよろしく願いいたします。

家族で、ひとりで、いつでも祈る習慣を 「家族の祈り」をご活用ください

7月1日に小冊子「家庭の祈り」が発行されました。熾町教会プロジェクトチームでは昨年10月から祈りの種類や順番、表紙デザイン等まで9ヶ月間にわたり編集作業を行いました。何時でも何処でも祈れるポケットサイズの冊子に26の祈りを掲載し、外国の人と一緒に同じ祈りが捧げられるように日英2ヶ国語表記とし、日本語には振り仮名もつけました。家庭年にあたり一家に1冊と言わず、一人1冊お持ちいただければと思います。



編集後記

被爆・終戦から70年。平和は未だに私たちに突き付けられたテーマです。重要な問題が議論されていますが、他人の意見や考えに耳を傾ける姿勢、自分の考えを押し付けるのではなく、理解が得られるよう努力することだけは、誰もが、ぜひ守ってほしいを感じています。(ひ)